

藤野哲也の



グローバル随想

第1回

シンガポール、ロンドン、 そして立食パーティ

話は少し遡る。第二次大戦時のイギリスのことである。日本軍の電撃的な攻略によってシンガポールが陥落し、軍人のみならず外交官や大量の民間人が捕虜になってしまったために東洋語を解する人材が一挙に不足する事態に陥ったのである。

日本軍の動向を分析したり、捕虜を尋問したりするのに日本語のできる人材は不可欠であり、結局、イギリスは急速に、日本語の専門家を育成することになった。担当機関としてロンドン大学が選ばれ、「戦中ロンドン日本語学校」が設立された。1942年のことである。

事は急を要する。戦時下の講師陣の編成も大変であるが、最大の眼目は誰を対象者、候補者とするかであろう。興味深いのは、イギリスがここで東洋語の経験者を起用せず、17から18歳ぐらいの才能溢れる青年を全国から集め、ゼロから彼らに日本語の特訓を施したことである。「日本語は難しいから」と言って経験者や漢字圏の出身者を起用しそうなものだが、「(難しいタスクには)頭のいい者を投入する」方針を採ったのである。彼らはそれぞれ1年余りで読み書き、会話ができるように育てられた。

彼らは元々優秀な若者であったから、戦中・戦後に与えられた任務を果たした後、大学や大学院に進学するなどして各界で活躍した者も多い。日本語や日本社会に関する知識を生かした者の中にはロナルド・ド

ーア（ロンドン大学教授、日本学士院会員）やヒュー・コータツツィ（サー・ヒュー、元駐日英国大使）などがある。ピーター・パーカーは実業界で活躍し、英国国鉄総裁を務めた。卒業生の中で最も著名な人物の一人である。

ピーター・パーカーはその後サーの称号を与えられ、現在は欧州三菱電機の会長職を引き受けている。そのサー・ピーターとロンドンのオフィスで日本企業の経営のグローバル化について話したことがある。日本人の発想の問題から最近の若い世代の変化など話は多岐にわたったのであるが、その中に日本企業における英語の問題があった。



日本人の中には「英語ができない」ということが経営のグローバル化にとって致命的な問題のように論じる傾向がある、という話を紹介し、彼の意見を聞いてみたのである。役員会を英語でやる、英語のできない者は役員に登用しないという意見まであることも紹介し、若い頃にイギリス人として日本語を身につけるという経験もし、今また日本を代表する大企業のグローバル化の前線に関わるようになった立場からの意見が聞けたらと考えた。

サー・ピーターによれば、三菱電機の本社役員会に招かれて話をしたときに一番驚いたのは役員会の人数の多さと「世界的な

大企業の役員会議室に同時通訳の設備がない」ことであり、日本人役員の英語の力量は全く問題にしていなかった。勿論、流暢に話せばそれに越したことはないであろうが、語学力に不足があればそれは同時通訳（設備）で補えばいい問題であり、むしろどのように経営のグローバル化を進めるかの中身の方がはるかに重要であるという答えであった。

三菱電機の名誉のために補足すれば、この時点での役員数の多さは決して三菱電機に限られた問題ではないし、現時点においても本社役員会議室に同時通訳の設備を有する日本企業はほとんどないであろう。その意味で、サー・ピーターの指摘は日本企業全体に当て嵌まる話だと考えていい。

経営の意思決定をおこなうような重要な場で、不得手な言葉を操ったり、相手の言うことを理解するのに四苦八苦しているようでは適切な決定はできない。「だから、英語力を！」というのは正論ではあるが、意味次第では実は極めて無責任な話ともなりうる。誰を対象に、いつまでにそれをやりとげようとするのか。売上や利益の半分以上を国内市場で稼ぐような場合、国内事業のスペシャリストは役員になれなくていいのか。英語力は幹部クラスやその候補生に求めるのか、それとも社内書類そのものを英語化しようというのか。徹底すれば学校教育から英語化しなくてはならないだろうが、その子らが日本企業の経営幹部になるのは先の話である。

しかし、実際の経営の現場は待ったなしである。言葉ができるから海外進出する訳でもないし、持てる力で問題に対応していかなざるを得ない。幸い、コミュニケーションというものは極めてプラクティカルなものである。エンジニアは多少言葉がたどた

どしくても設計図面や強度計算の算式などを媒介にして意思を疎通させることができるし、経理マンは仕訳や会計原則などを手助けにして自分の考えを相手に伝えることが可能である。海外子会社の前線に放り込まれれば持てる英語力を総動員してコミュニケーションしようとするものであるし、道に迷えば手振り身振りも交えて必死に聞くであろう。追い込まれたらできるのであれば、初めからもっと自分たちなりの英語を押し通せばいいのではないだろうか。

立食形式のパーティに出ると、外人はまずはグラス片手にあちこちで話し込む姿を多く見受けるが、日本人は食べる方に精を出し、拳句の果ては椅子があれば座ってしまう人が多い。外国人は多くの人と知り合い、いろいろな話を聞くチャンスを求めて来ているのに対して、日本人はまるで参加することに意義を求めているかのようである。それは英語ができないからだ、というのは嘘である。高校レベルの語彙があればパーティで人に話し掛けるには十分であろう。「日本人は英語ができない」のではなく、それ以前に「使う習慣が身に付いていない」のである。

ABBの会長、パーシー・バーネビクが「当社の社内公用語は英語ではなく、バッド・イングリッシュだ」と言った意味をよく考えてみたいものである。（長崎大学経済学部教授）■

（戦中ロンドン日本語学校については、大庭定男『戦中ロンドン日本語学校』中公新書、リチャード・メイソンのベストセラー小説『風は知らない』英宝社（原題“*The Wind Cannot Read*”）などがある。いずれも絶版になっていますので図書館などで参照されたい。後者は映画にもなっている）

（ふじの・てつや）1975年一橋大学卒業。石川島ブラジル造船所企画課長、石川島播磨重工業国際金融グループ課長などを経て、現職。主な著書に『比較経営論—ソトに出た日本型経営と欧米多国籍企業—』（千倉書房、1995年）、『グローバリゼーションの進展と連結経営—東南アジアから世界への視点—』（文真堂、1998年）など。